

日本英文学会関東支部
第 13 回 (2016 年度秋季大会)
プログラム

日時： 2016 年 11 月 12 日 (土)

会場：フェリス女学院大学緑園キャンパス

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3

アクセス

相鉄いずみ野線「緑園都市駅」下車・徒歩 3 分 (横浜→緑園都市約 20 分)

JR 横須賀線「東戸塚駅」で神奈中バス (緑園都市駅行) に乗り換え

「フェリス女学院」下車・徒歩 1 分 (東戸塚→フェリス女学院約 15 分)

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail:kanto@elsj.org

11:30 —	<p>開場・受付開始</p> <p>(受付：7号館2階ロビー、部門別シンポジウム終了後の受付はキダーホール・ロビー、控室：203教室)</p>		
11:40 12:10	<p>総会</p> <p>7号館305教室</p>		
研究発表 12:20 13:00	<p>第1会場 7号館 207教室</p> <p>「あの娘には何かが欠けている」Aldous Huxleyの<i>Point Counter Point</i>における女性たち (発表者) 東京大学非常勤講師 小澤 央 (司会) 中央大学准教授 長島 佐恵子</p>	<p>第2会場 7号館 206教室</p> <p>自伝的作品における真理の探究—J. M. Coetzeeの告白論と<i>Summertime</i>— (発表者) 東京大学大学院 金内 亮 (司会) 慶應義塾大学教授 佐藤 元状</p>	<p>第3会場 7号館 205教室</p> <p>白さをめぐって—ジョエル・パーロウの叙事詩『コロンビアック・ファミリー』(1807年)とマンコ・カパック・ファミリー (発表者) 慶應義塾大学大学院 小泉 由美子 (司会) フェリス女学院大学教授 渡辺 信二</p>
	<p>第1会場 7号館 207教室</p> <p>Thomas Hardyの共感的知性：Judeと共に (発表者) 東京大学大学院 渡辺 優理恵 (司会) 茨城キリスト教大学助教 唐戸 信嘉</p>	<p>第2会場 7号館 206教室</p> <p>Haunted CastleとしてのClongowes Wood College：ジェイムズ・ジョイス『若き日の芸術家の肖像』における亡霊表象について (発表者) 早稲田大学大学院 小林 広直 (司会) 一橋大学教授 金井 嘉彦</p>	<p>第3会場 7号館 205教室</p> <p><i>Sir Gawain and the Green Knight</i>における‘prys’——Gawainのアイデンティティの形成をめぐって (発表者) 立教大学大学院 玉川 明日美 (司会) 東京大学大学院教授 小林 宜子</p>
部門別シンポジウム 14:00 16:00	<p>英米文学部門シンポジウム (7号館201教室)</p> <p>病から考える——文学と医療のはざま (司会) 明治学院大学准教授 貞廣 真紀 (講師) 東京大学准教授 阿部 公彦 (講師) 奈良女子大学教授 横山 茂雄 (講師) 日本大学准教授 牧野 理英 (講師) 慶應義塾大学教授 鈴木 晃仁</p>		<p>英語教育部門シンポジウム (7号館202教室)</p> <p>「教室の英文学」を考える (司会・講師) 東京女子大学教授 原田 範行 (講師) 東京大学教授 田尻 芳樹 (講師) 研究社編集者 津田 正 (講師) 東京理科大学専任講師 張替 涼子 (講師) 成蹊大学准教授 バーナビー・ラルフ</p>

<p>特別講演 (キダー ホール)</p> <p>16:15 18:15</p>	<p>Mary Shelley and Shakespeare; <i>Frankenstein</i>, and Theatricality (司会) フェリス女学院大学名誉教授 久守和子 (講師) Professor Emeritus Anglia Ruskin University Nora Crook</p>
<p>18:30 20:30</p>	<p>懇親会 (カフェテリア・アンデレ) キャンパス・マップ上の「③食堂」</p>

開場・受付開始（11:30 より 7号館 2階ロビーにて）

12:20-13:00

【研究発表】

第1会場（7号館 207教室）

（発表者）東京大学非常勤講師 小澤 央

（司会）中央大学准教授 長島 佐恵子

「あの娘には何か欠けている」Aldous Huxley の *Point Counter Point* における女性たち

Aldous Huxley の代表作 *Point Counter Point* (1928年) は、同時代の男性芸術家・知識人をモデルとした登場人物、語りの構造などをめぐる実験的手法によって知られる。しかし、物語において重要な役割を果たす多くの女性たちには、あまり焦点が当てられてこなかった。本発表では、そのような女性たち、わけても、伝統的な「女性」像とは相容れない生き方や思考を示す登場人物に注目する。彼女らもまた、それぞれ作者と親しかった実在の女性をモデルとしている。伝記的事実に鑑み、さらにジェンダー批評的観点をも取り入れつつ、そのキャラクターライゼーションについて検討する。そして、昨今の文学研究ではあまり顧みられることのない *Point Counter Point* という作品、オルダス・ハックスリーという作家の今日における意義について考えたい。

第2会場（7号館 206教室）

（発表者）東京大学大学院 金内 亮

（司会）慶應義塾大学教授 佐藤 元状

自伝的作品における真理の探究—J. M. Coetzee の告白論と *Summertime*—

J. M. Coetzee (1940-) の告白論 “Confession and Double Thoughts: Tolstoy, Rousseau, Dostoevsky” (1985) は、彼の自伝的作品を論じようとする研究者によって幾度も参照されてきた。しかし、この告白論が持っている深い射程についてはほとんど論じられてこなかったように思われる。本発表は、Coetzee の告白論を、それがキリスト教における告白の制度とその歴史を問うているのであるという観点から読み返す。

その後、彼の自伝的三部作の第三作品である *Summertime* (2009) を分析する。告白が構造的に備えている果てしなさを指摘した Coetzee は、この作品において「自己についての真実」をどのような形で探究しているのだろうか。自伝的三部作の第一作である *Boyhood* (1997)、第二作である *Youth* (2002) との関係を意識しながら、主に本作品で用いられているテキスト戦略を分析することで、この点を明らかにすることを目指す。

第3会場（7号館205教室）

（発表者）慶應義塾大学大学院 小泉 由美子

（司会）フェリス女学院大学教授 渡辺 信二

白さをめぐって—ジョエル・バーロウの叙事詩『コロンビアッド』（1807年）と

マンコ・カパック・ファミリー

コネティカット・ウィッツの一人として知られるジョエル・バーロウ (Joel Barlow, 1754-1812) の叙事詩『コロンビアッド』(*The Columbiad*, 1807) は、コロンブスを「我々の半球の発見者 “the discoverer of our hemisphere”」(Barlow xxxix) として主軸に据えた愛国的作品である。本作において、コロンブスは、「西回りでインドへ至る道」(xxiii) を開拓し、いまだ「見知らぬ地、名も無き河」(I l. 297) を目にする人物として提示される。しかしもちろんその名も無き土地には先住民が住んでいた。本作第二部と第三部において、コロンブスと、彼を導くヘスパーは、先住民の性格や慣習について対話を重ねたのち、インカ初代国王マンコ・カパックとその家族をめぐり物語を極めて肯定的に語る。先行研究も指摘するとおり、そこには同時代アメリカの理想が幻視されている (Bauer 219; Wertheimer 58)。本発表では、以上を踏まえつつ、国王マンコ・カパックの息子ロチャと妻オエラの描写において奇妙に強調される「白さ」を、同時代の人種・ジェンダーをめぐり言説と照らし合わせて考えてみたい。

13:10-13:50

第1会場（7号館207教室）

（発表者）東京大学大学院 渡辺 優理恵

（司会）茨城キリスト教大学助教 唐戸 信嘉

Thomas Hardy の共感的知性：Jude と共に

Thomas Hardy (1840-1928) の日記から彼が読者の共感を得たいと願っていたことが伺える。しかし、一方では *Jude the Obscure* (1895) に見られるように、語り手は距離を置いて、Jude の様子を追うのみなのである。ここでは主人公の Jude は貧困から抜け出すことができず、夢を一つも実現しないまま悲劇的な死に向かう。一般的に Hardy は悲観的、決定論的であるとラベルが貼られているが、彼の作品のどのような部分に共感を見出すことができるのだろうか。

しかし、小説を読むと、主人公に対する痛みを、自分の身がちぎれるかのように感じる読者は多いのではないだろうか。本発表では sympathy (哀れみ) と empathy (自己移入) の違いを理解しながら、Hardy の小説でどのように共感を表現されているかを考察する。empathy という単語が英語に導入されたのもちようどその時代でもあり、共感に対する思考にも変化があっただろう。本当の共感の難しさを多くの作家たちが理解していた中、Hardy は擬似体験の技法に目を向けた。

第 2 会場（7 号館 206 教室）

（発表者）早稲田大学大学院 小林 広直

（司会）一橋大学教授 金井 嘉彦

Haunted Castle としての Clongowes Wood College :

ジェイムズ・ジョイス『若き日の芸術家の肖像』における亡霊表象について

ジェイムズ・ジョイスの自伝的教養小説『若き日の芸術家の肖像』（1916）第 1 章第 2 節には、イエズス会の運営する全寮制学校、Clongowes Wood College に入学して間もない主人公スティーヴン・デダラスが描かれている。本発表は、彼が眠りにつく前に暗闇の中に幻視した“the ghost of a murderer”を考察する。先行研究ではこの亡霊について Sheldon Brivic が精神分析の見地から「父殺し」のモチーフを抜き出しているが、この亡霊が Maximilian Ulysses von Browne という名の Wild Geese の末裔であることを鑑みた時、Clongowes にまつわる他の歴史的人物（ロウアン、トーン、パーネル）と重層化されているのがこの亡霊であると言えるのではないか。この仮説を立証すべく、スティーヴンが想像の中でひとりの亡霊を〈複数化〉してしまうことの意義を、歴史的文脈から再解釈してみたい。

第 3 会場（7 号館 205 教室）

（発表者）立教大学大学院 玉川 明日美

（司会）東京大学大学院教授 小林 宜子

Sir Gawain and the Green Knight における ‘prys’

——Gawain のアイデンティティの形成をめぐる

Sir Gawain and the Green Knight は、主人公 Gawain の「騎士」としての理想と、自らの命に対する執着との間で葛藤する心理が細やかに描かれた作品として、多くの研究者から注目されてきた。従来、Bertilak 卿の夫人の誘惑に対する Gawain の行動について、生への執着が騎士としての「美德」を脅かす、物語の結末を皮肉的に暗示するのではないかと議論されてきた。本発表では、そうした誘惑の場面における Gawain の言動について、奥方や Bertilak 卿といった他者から常に問われ続ける、「騎士」としてのアイデンティティを再構築する過程を描いたものとして再検討する。特に、Gawain の「美德」や「価値」を表現するために繰り返し使用される ‘prys’ を中心に、各登場人物にかかわる言語表現を詳細に分析し、これらの表現を通して、いかに Gawain の自意識が物語の中で描かれているかを明らかにしたい。

14:00-16:00 (7号館 201 教室)

【英米文学部門シンポジウム】

病から考える——文学と医療のはざま

(司会) 明治学院大学准教授 貞廣 真紀
(講師) 東京大学准教授 阿部 公彦
(講師) 奈良女子大学教授 横山 茂雄
(講師) 日本大学准教授 牧野 理英
(講師) 慶應義塾大学教授 鈴木 晃仁

病とは何か。そして、文学と医療は近代主体をどのように形成し、今日、両者はどのような関係
を結びうるのか。医療現場においては患者自身による語りの重要性は広く認識されており、「メデ
ィカル・ヒューマニティーズ」(医療人文学)プログラムは医学教育制度として定着している。他
方、文学においては、消化不良などの慢性疾患、摂食障害や感染症、あるいは癌、結核、エイズと
いった生命を脅かしかねない病など、病や障害とそれに伴う医療行為は、直接的にも隠喩としても
古くから描かれている。それは作家にとって、自らの身体と「生」を輪郭づける術でもあった。

21世紀に入ってから、『身体医文化論』(慶應義塾大学出版会)シリーズを筆頭に日本でも多く
の重要な研究が行われてきた。本シンポジウムは、日英米文学における病の表現をたどり、障害学
も射程に入れながら改めて「文学と病」「文学と医療」を問い直す試みである。「人文学の消滅」が
問題化される現在、文学という制度を一旦括弧に括るインターディシプリナリーなアプローチは、
その価値と使命を考えることにも繋がるだろう。

■ 「ゲロ」の謎

阿部 公彦

現代日本の小説でもっとも頻繁に目にするアイテムの一つは「ゲロ」である。なぜ小説の主人
公たちは、かくも頻繁に嘔吐するのだろうか。小説の主人公には胃弱者が多いのだろうか。彼ら
の間では消化器の病が蔓延しているのか。この謎に迫るために本発表では少し時代を遡り、「元祖
胃病作家」たる夏目漱石や、正宗白鳥、上林暁、ジェームズ・ジョイスなどの作品に触れつつ、
胃部不快感が文学作品の中で持ってきた意味について考察したい。

英語の *disgust* や日本語の「むかつき」という語に見られるように、しばしば胃部不快感は純
粋な身体性だけではなく、精神的な意味をも併せ持つ。この傾向は近代になって強まった。もと
もと西洋では、中世から近代への移行期に分泌物や排泄物など身体の私的な部分をめぐるタブー
が強化された。宗教の衰退とともに人が嫌悪感を身体的・生理的に表現するようになったことと
もこれは密接に関係するだろう。他方、小説とはまさにそうした私的部分への関心に支えられた
ジャンルなのである。そこに「ゲロ」の謎を解く鍵がありそうだ。

■ 拒食症と奇蹟——「ウェールズの絶食少女」の場合

横山 茂雄

食物を拒否する、摂らずに生きるというのは、近代以前の西欧社会にあつては基本的に宗教の領域に属していた。すなわち、苦行としての断食、奇蹟としての絶食、そして、悪魔憑きの徴候としての拒食。

思春期の少女に多く見られる摂食障害が、イギリスとフランスの医学者—ウィリアム・ガルとエルネスト＝シャルル・ラセグ—によって「ヒステリー性無食欲症」という用語で初めて記述されるのは、一八七三年のことになる。いっぽう、その僅か数年前の一八六九年末、ウェールズの僻地で、セアラ・ジェイコブという十二歳の少女が、ロンドンから派遣された医師および看護婦による厳重な監視下で絶食状態の裡に息を引き取っていた。

セアラの名前は、その生前、「ウェールズの絶食少女」としてイギリスの新聞、雑誌を通じて喧伝された。彼女の存在は宗教的な奇蹟もしくは超自然的現象として、当時の人々の心に強く訴えかけたのだが、イギリス医学界は、世間に瀰漫する非科学的思考、軽信の許しがたい例としてこれを厳しく弾劾し、調査に乗り出したのであった。

本発表では、この著名な事例を、ヴィクトリア朝後期において宗教と医学、聖と俗が交錯した代表的事例のひとつとして再検討してみたい。

■ 抵抗言説としての障害——心身障害からみるアメリカ文学

牧野 理英

アメリカ文学において障害のモチーフは、病であると同時にその社会に通底する国家的イデオロギーに順応しない（順応できない）抵抗の言説として提示されている。本発表ではそうした心身障害のモチーフを使用する日系作家のアメリカ文学に対する見解を検証してみたい。

第二次世界大戦の収容所に関して語ることをしない、あるいはできない日系アメリカ人は、自身を「片輪」や「汚れ」と称し、戦後のアメリカ社会に対する批判的見地を示していた。勝利に酔いしれる戦後アメリカで、戦争の記憶に対し集団的記憶喪失状態となっていた日系社会で育った作家の視点はどのようにキャンノンと言われるアメリカ文学を見ていたのか？本発表では日系作家およびジャーナリスト（ここではヒサエ・ヤマモト、チャールズ・キクチ、カレン・テイ・ヤマシタなど）に焦点を絞り、彼らの視点を考察してみたい。

■ 20世紀前半の日本における文学作品と精神科症例誌——「精神疾患の語り」の同時発生

鈴木 晃仁

この報告は、20世紀前半の日本の文学作品と精神医学の症例誌の双方において精神疾患の語りと同時に発生した理由と構造を考察するものである。

日本の文学史において20世紀前半という時代は、精神疾患の患者の言動が主題となる作品が数多く現れた時期である。『夜明け前』『智恵子抄』『ドグラ・マグラ』などの著名な作品などが、精神疾患の患者の様子を伝えている。一方で、同じ時期の精神医療においても患者の言動が詳細に再現されている。ことに、精神病院の症例誌（カルテ）において、患者の言動が記録され、患者が自発的に作成した回想、詩、絵画といった作品が含みこまれている。

この精神疾患の声が記録される仕組みは、文学と症例誌という二つの領域においてなぜ同時に発生したのか。このことは日本の近現代にどのような意味を持つのか。そういった問いに答えてみたい。

14:00-16:00 7号館 202 教室

【英語教育部門シンポジウム】

「教室の英文学」を考える

(司会・講師) 東京女子大学教授 原田 範行

(講師) 東京大学教授 田尻 芳樹

(講師) 研究社編集者 津田 正

(講師) 東京理科大学専任講師 張替 涼子

(講師) 成蹊大学准教授 バーナビー・ラルフ

英語で書かれないいわゆる文学作品を、日本の高等教育において扱う意味はあるのか。あるとすれば、それを具体的にはどのような形で実践すればよいのか。この問題を、英語の授業（いわゆる語学の授業）の場合、教養科目としての文学の授業（理科系の学生なども含む）の場合、そして英文科の専門の講義や演習の場合などを想定して考察し、具体的な提言を発することが、本シンポジウムの趣旨である。実際には、こうした課題について、『教室の英文学』という一書が、日本英文学会関東支部理事会の企画として今年、研究社より刊行予定であり、そこに、概ね関東支部会員を中心に約 30 名の気鋭の研究者からのご寄稿をいただいているので、その成果をご紹介しつつ（主に原田）、こうした視点で英語による文学作品を考えることの意味、効果的な授業実践の方法、文学研究者がはまりやすい教育実践における陥穽などを検証し（主に田尻、津田）、それと同時に、海外で英文学研究に従事して博士学位を取得し、最近、日本で大学専任職に就いた若手研究者は、このような問題をどう考えるのか（主に張替）、そしてまた、日本の大学で専任教員とし英文学を講じるネイティブの教員は、このような問いにどのような見解を持つか（主にラルフ）、という内容によってシンポを構成したい。フロアに、メディア関係者や教育行政関係者などお呼びできれば、より多角的なディスカッションが期待できよう。

■ 「教室の英文学」という方法論

原田 範行

『教室の英文学』（研究社刊）という書物の出版が、なぜ日本英文学会関東支部理事会で計画されることになったのか、その方向性や想定読者、目次の構成等を検討する中で、具体的にどのような問題あるいは課題が浮かび上がったのか、原稿を執筆したり依頼したりする過程で気づいたことは何か、そして、この「教室の英文学」という考え方には、どのような方法論的可能性が見出されるか——こうした項目を整理して分析しつつ、「教室の英文学」の今後の展開を考えたい。

■ 批評を教える

田尻 芳樹

『教室の英文学』では、「文学批評への誘い」という項を担当した。批評の授業では、主に学生に作品を批評させる（レポートなどで思ったことを書かせる）場合と、批評理論を教える場合があると思う。前者に関しては、それが今日どういう意味を持つのかを、大学という制度の中での文学「研究」と、その外での文学の実践の関係を歴史的に遡りながら考え、後者に関しては、現代の思想潮流に触れさせるというプラス面とカタログ的情報を大量に投げつけて消化不良を起こしかねないというマイナス面を指摘した。今回の発表では、これらの論点をふまえながら、批評を教えることの意味を考え直したい。

■ 英文学会が教育について語ることについて

津田 正

日本英文学会が遅ればせながら英語教育に関する発表やシンポジウムを受け入れるようになって10年以上が経過しますが、「最近は文学系の学会へ行っても英語教育の発表が多くて知的興奮に乏しい」（@某批評系アメリカ文学者）という批判もここ数年耳にするようになりました。一編集者ごときに定見などありませんが、「英文学の教室」を論じることの希望と退屈さについて、ぼんやりと考えていることを述べたいと思います。

■ 英文学を教室に

張替 涼子

大学の教養科目の教材としての英文学作品の価値を再考したい。最近読書をしない学生が多く、英語でのコミュニケーション能力が重視される傾向もあることから、英文学作品を扱う授業は決して多くない。学生の方も大学入試に照準を合わせて英語学習をしてきたため、文学作品を読むことを苦手としていることが多い。しかし、実際には文学作品を授業で扱うことを希望する学生は多いようである。自分なりの解釈をするために原典を読み込むという作業は学生の主体的な英語学習にもつながるはずである。英文学を大学の教室にうまく取り入れるための一つのステップとして、テスト形式の見直しを考えてみたい。学生の学習内容を左右するもっとも大きな要因の一つはテストといえよう。英国のオクスブリッジなどでは、期末テストは論述形式である。学生は自分の選んだテーマに関して徹底的に調べ上げ、それを論述することが求められる。一つのテーマに関する深い理解をさせることが学習の目標なのである。日本の大学における英語学習の目標と目標の達成度を測るテストの可能性を探ってみたい。

■ A Room of One's Own

Barnaby Ralph

I was once at a conference where the plenary speaker, championing extensive reading, said that it did not matter whether students read simple magazines or “serious literature

like *The Da Vinci Code*”, as long as they read. This person was then (and remains) a tenured professor in a Japanese university. For them, “literature” was apparently a means to an end. Perhaps even more worryingly, out of the thousands of possible choices of great literature from which they could have drawn their example, they felt that something as banal as a Dan Brown thriller was appropriate.

The teaching of literature is a serious vocation, but it is rarely taken to be such by the majority of foreign teachers who deal with it in Japanese universities, many of whom are language teachers who either read as a hobby or are drawing on long-forgotten High School classes on *Lord of the Flies* and *The Catcher in the Rye*. I shall discuss some of the problems facing genuinely qualified academics who are interested in pursuing both teaching and research, as well as personal reflections on classroom techniques and ways to address some of the major issues faced.

16:15-18:15 キダーホール

【特別講演】

Mary Shelley and Shakespeare; *Frankenstein*, and Theatricality

(司会) フェリス女学院大学名誉教授 久守 和子

(講師) Emeritus Professor of English Literature Anglia Ruskin University

Nora Crook

“But Shakespeare one gets acquainted with without knowing how. It is a part of an Englishman’s constitution” (Jane Austen, *Mansfield Park* [1814])

Mary Shelley grew up in an early nineteenth-century London household where knowledge of Shakespeare was part of a well-educated Englishwoman’s constitution no less than an Englishman’s. The Godwins’ *Juvenile Library* published Charles and Mary Lamb’s *Tales from Shakespeare*. Reading, learning by heart, theatre-going, illustrations, such as those issued by the Boydell Shakespeare Gallery—all instilled a deep familiarity with Shakespearean language, plots, and characters. The Shelleys’ friendship with Leigh Hunt, which started in early 1817, before *Frankenstein* was completed, brought them into contact with one of the leading British theatre critics of the age. Mary Shelley never quotes directly from Shakespeare in *Frankenstein*. Yet early reviewers of *Frankenstein* rightly saw parallels between the Creature and Caliban, Prospero’s deformed servant in Shakespeare’s *The Tempest*, and it is not the only Shakespearean play to which we may see allusions. Moreover, *Frankenstein* is permeated by the theatrical: there are frequent points at which one can see the effect of Mary

Shelley's familiarity with the theatre in descriptions of attitudes, gestures, expression, and dialogue. 2016, which marks the 400th anniversary of Shakespeare's death and the 200th anniversary of *Frankenstein's* birth, is a fitting year to consider *Frankenstein*, Shakespeare, and the early nineteenth-century British theatre in relation to each other. The paper will be illustrated with images of Shakespearean scenes of 1785–1818.

懇親会 (18:30-20:30)

会場 カフェテリア・アンデレ
キャンパス・マップ上の「③食堂」

会費：4,000 円（学生 2,000 円）

事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

キャンパス・マップ/ 会場アクセスマップ・懇親会会場



- 正門 (1号館①側) からのみ入校可です。
- 正門から入り、数段の階段をのぼって直進してください。
- キャンパス・マップ上の白い線はバリアフリーの経路です。7号館⑦と8号館⑧のあいだから7号館に入っていただくとエレベーターで2階に行くことができます。

研究発表：7号館 205,206,207 教室、控室：7号館 203 教室

書店展示：7号館 2階ロビー (受付脇)

英語教育部門シンポジウム：7号館 201

英米文学部門シンポジウム：7号館 202

特別講演：キダーホール

懇親会：カフェテリア・アンデレ